

あとかき

# 2022 年を振り返る

専修大学スポーツ研究所 所長

佐藤 満

2022年は1年延期した2021年東京オリンピック・パラリンピックの余韻に浸る間もなく、コロナ禍にも関わらず国内外でさまざまなスポーツイベントが開催され、スポーツの話題が満載の年となった。

## ●北京冬季オリンピック・パラリンピック

中国の北京で開催された冬季オリンピック・パラリンピックでの日本代表は、スキージャンプ・ノーマルヒル個人小林陵侑選手、男子ハーフパイプの平野歩夢選手、そしてスピードスケート女子1000mの高木美帆選手と3つの金メダルを獲得した。スピードスケートでは急成長した専修大学の森重航選手が男子500mで見事3位入賞し銅メダルを獲得、日本男子スピードスケートのメダル獲得は3大会ぶりであった。彼自身の努力と才能はもちろんであるが、彼の育った環境から伝統ある専修大学スケート部へ入学し、代表チームでの様々なサポートスタッフに恵まれての快挙であり、4年後の活躍が我々にとって大変楽しみである。

## ●サッカーワールドカップ

初の中東開催となった国際サッカー連盟(FIFA)ワールドカップ(W杯)カタール大会での森保一監督率いる日本代表は、初戦ドイツに2-1と逆転勝ち。コスタリカ戦には0-1で敗れたが、スペイン戦では2-1と逆転勝利。優勝経験のある強豪国を相次いで撃破し、決勝トーナメント進出を果たした。決勝トーナメント1回戦では前回準優勝のクロアチアと対戦、延長戦を1-1で終え、PK戦(1-3)の末、惜しくも敗退。目標のベスト8の壁にまたも跳ね返され、森保一監督の言う「新しい景色」を見ることはできなかった。しかし、サッカーW杯は日本中に夢と感動と勇気を与え、「ブラボー」と沸いた大会であった。

自身の経験からもトップとナンパーズでは見える景色はかなり違う。日本サッカーの念願であるベスト8の景色も大きな壁となっ

て立ちほたり、「夢の実現」には一度や二度、壁に阻まれるのはむしろ当然かもしれない。何の障害もなく挫折もなく壁を乗り越えられるのならそれは「夢」でないのではと思う。それぞれのスポーツ、それぞれの分野で自分の可能性に何度も挑戦し続けていることが人生の意義であり価値を高めると考える。次回のW杯でその壁をチーム一丸となって乗り越え、「新しい景色」が見えることによって、日本サッカーの未来はさらに高い志の仲間たちで発展し、次世代に繋がっていくと思う。

## ●ベースボール

プロ野球ではロッテ佐々木朗希投手の完全試合達成。そしてシーズン終盤の話題は「村神様」ことヤクルト村上宗隆選手の令和初の三冠王を最年少22歳で達成。アメリカメジャーリーグ(MLB)では大谷翔平選手がベープ・ルース以来の「2桁勝利と2桁本塁打」達成。

そして今年が5回目となる野球世界一を決めるワールド・ベースボール・クラシック(WBC)が、コロナにより2年延期となり、今年3月に開催される。2022所報完成時には、日本代表が第2回大会以来3度目の優勝となるか。

近年、野球はサッカーやバスケット、卓球、バドミントンなどに押され気味、競技人口の減少は長期的な低迷傾向が続いている。WBCでは日本選手が活躍し、子供達に夢と感動、勇気を与え、そこから野球を含めて子供達には多くのスポーツに親しんでもらいたいと切に願う。

## ●スポーツの「光」と「影」

スポーツオタクの筆者であるが、例年通り2022年もさまざまなスポーツを観戦し、満喫した1年であった。満喫した「光」とは反対にたくさんの「影」が連日報道された。

北京での人権問題に始まり、ワリエフ選手のドーピング問題、そしてロシアのウクライナ侵攻。サッカーW杯における開催地決定

の疑惑や労働問題。そして最も残念な東京オリンピック・パラリンピック汚職問題である。2030年札幌オリンピック・パラリンピック開催がほぼ決定と言われていたが、スポーツビジネスでの裏側における不正のために開催地決定が延期となった。

クーベルタンのオリビズムの目的から考えると、オリンピックのあるべき姿は「スポーツを通して体を鍛えよう」「世界のいろいろな国の人と交流しよう」「平和な社会を築いていこう」から、「スポーツを通して心身を向上させ、文化・国籍などさまざまな違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって、平和でよりよい世界の実現に貢献すること」である。現在のIOCに教育者クーベルタンの精神がそのまま継承されているのか、また世界のアスリートたちが理解しているなかで金メダルを目指しているか甚だ疑問である。IOCのロシア、ベラルーシのオリンピック参加是非の話題もあり、肥大化された商業主義の中で成立しているオリ・パラやW杯などのトップの方向性を今後も見届けたい。

## ●スポーツ研究所の活動

本年度、専修大学スポーツ研究所(SUIS)は、昨年まで学内外から注目され開催していたシンポジウムは一区切りとして開催せず、今後のシンポジウムの在り方を検討中である。

研究活動では、各所員の研究意欲は旺盛であり、研究会の第1回目では各所員からプロジェクトの研究報告が行われた。第2回目は「大学体育会の強化の実際～大学職員と指導者の両立～」をテーマに、職員の傍ら現場で活躍されているバスケットボール監督佐々木優一氏、馬術部監督西山慶太氏の両氏をお招きして開催された。両氏は職場での労働時間において制約されるため、睡眠時間などを削りながら体育会学生のために様々なアプローチを用いてサポートされていた。他にもたくさんの優秀な職員の方々がおり、スポーツ研究所としては横の連携を密に図りな

がら、どのようなサポートができるか模索していきたい。第3回目は前年度国内研究員の吉田清司先生の研究報告であった。アナリストとして日本の第一人者である現場の研究は大変興味深く、有意義な研究会となった。

研修会は3年ぶりに沖縄と東北の2グループに分かれて実施した。フィールドワークとして各地域による積極的なスポーツの取り組み、研修会における人的交流、意見交換は大変有意義であった。

社会貢献活動では、実践公開講座「中高年の健康を考える」はコロナ禍で実施できなかったが、来年度は実施する方向で検討中である。また「子どもの“からだ”と“うごき”と“こころ”づくり教室」はようやく年度後半から実施され、全国2位の選手が生まれた。練習頻度が他チームより少ない中での快挙は、選手の能力と共に発育発達に適した指導の一助であろう。

川崎市、狛江市など外部諸機関との連携も多岐にわたり、コロナ禍ではあるが一歩づつスポーツ研究所の活動として歩み始めている。各所員は研究意欲旺盛な仲間であり、それぞれの各スポーツ分野での個性溢れる研究が融合し、創造性を発揮して新たな知見を各方面へ提供してもらいたい。長年にわ

たり研究所にご尽力した久木留毅先生が昨年度末に退職された。これまでのスポーツ界に対する貢献・功績が高く評価され、日本のトップアスリートの強化拠点であるハイパフォーマンススポーツセンター(HPSC)及び国立スポーツ科学センター(JISS)の長に任命された。今後のご活躍を祈念申し上げます。これを契機に研究所とHPSCとの連携も検討したい。

### ●人間の可能性

人間の可能性は無限である。サッカーW杯日本代表のドイツとスペインを撃破、MLBは二刀流大谷翔平選手の大活躍など分野を超えてトップを目指す人たちは高い志を持ち、失敗と成功を繰り返して夢を叶える。<NBAマジック・ジョンソンが子供達に贈った言葉(抜粋、一部削除・修正)> 『『お前は無理だよ』と言う人の事を聞いてはいけない。もし、自分で何かを成し遂げたら、出来なかった時には他人のせいにして、自分のせいにしなさい。』

多くの人が僕にも、『お前には無理だよ』と言った。何故なら、彼らは成功できなかったから。途中で諦めてしまったから。だから、・・・

決して諦めては駄目だ。自分の周りをエネルギーであふれ、しっかりとした考えを持っている人で固めなさい。自分の周りを野心にあふれ、プラス思考の人で固めなさい。近くに誰か憧れる人がいたら、その人にアドバイスを求めなさい。

君の人生を考えることができるのは君だけだ。君の夢が何であれ、それに向かって行くんだ！君は幸せになるために生まれてきたんだ。』

現在の研究所の環境は筆者が入職時の20年以上前と比較すると、充実ぶりは雲泥の差である。これも多くの所員たちのご尽力と本学の研究所に対するサポートの賜物であり、当時の研究環境からは誰も想像できないほど充実した環境である。これからもエネルギーあふれる所員たちと「長期的な展望としっかりした目標を持ち、懸命に努力を重ねればその一念は必ず叶う」(ノーベル生理学・医学賞受賞者・山中伸弥氏)の言葉のとおり、目標達成のために野心にあふれ積極的思考で「ビジョンとハードワーク」を得意とする専修大学スポーツ研究所(SUIS)として発展したい。



## 専修大学スポーツ研究所

佐竹 弘靖	佐藤 雅幸	吉田 清司
佐藤 満	飯田 義明	齋藤 実
渡辺 英次	平田 大輔	富川 理充
時任真一郎	李 宇諤	相澤 勝治
柏木 悠		

## 専修大学スポーツ研究所報 2022

令和5年3月31日  
監修 佐藤 満  
編集 柏木 悠  
発行者 平田 大輔  
発行所 専修大学スポーツ研究所  
〒214-8580  
神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1  
電話・ファクシミリ 044-911-1032  
E-Mail sports@isc.senshu-u.ac.jp  
デザイン 山岸淳デザイン(株)